

OECD編著「OECD教育政策分析」を読む

- よく読書をする生徒の読解力の成績を考える -

よく読書をする生徒の読解力得点の平均は、家庭背景の良し悪しにかかわらず、国際平均(500点)を著しく上回っている。反対に、ほとんど読書をしない生徒は、両親の職業的地位と無関係に国際平均を下回っている。それぞれの職業的地位グループにおいて最も読書をしない生徒集団は、読解力の平均点が、よく読書をする生徒よりも 85-117 点低い。この違いが最も大きいのは、両親の職業的地位が最も低い生徒たちである。

これらの知見は、教育学的見地からは非常に重要である。生徒を読書に取り組ませることは、家族背景の違いからくる生徒の読解力の得点の格差を縮めるのに重要な役割を果たすという解釈を導き出すことはできる。また、この目標を達成すれば、それ以外の重要な教育目的を果たすのに役立つことになるだろう。なぜなら、読解力は、カリキュラム全体を通して求められる基本的な技能だからである。

P.77

教員は、一人ひとりの生徒に技能を習得させて、よく本を読むようにさせなければならない。また、その生徒に読書への興味を持たせなくてはならない。もし、これら相互に強化されるべき目的が達成されれば、あらゆる背景を持つ生徒のためにうち立てられた生涯学習の基盤は、今まで以上に強固なものとなるであろう。

P.78

OECD編・御園生純監訳「世界の教育革命2、OECD教育改革分析 - 早期幼児教育、高水準で公平な教育、教育的労働力、国境を越える教育、人的資本再考 - 」

明石書店 2006年6月30日刊

- 2006年9月23日記 -